

- 1 派遣期日 令和元年7月20日（土）
- 2 研修先 茨城大学教育学部附属小学校
茨城県水戸市三の丸2-6-8
<http://www.esch.ibaraki.ac.jp/>

3 研修内容

（1）視察校における研究の取り組み

研究主題 “学び”を楽しむ（第1年次）



～道徳科・学級活動（こころの時間）の考え方「よりよく生きようとする」～

茨城大学附属小学校のこころの時間は、子どもが自分たちを取り巻く「今」に向き合い、語り合ったり行動したりすることで、心を耕していく時間である。こころの時間は、道徳科（自分の時間）と学級活動（なかまの時間）の二つの内容を併せもつ時間として位置付けられている。道徳科では、子どもたちの「今」に沿った教材を基に本音で語り合い、他の思いを受け止めながら自分の考えを見つめ直すことで、よりよく生きるための礎をつくっていく。学級活動では、子どもたちの「今」に沿って、話し合いや共に目的を実現していく様々な体験や活動を行うことを通して、よりよい生活をつくっていく。附属小学校では、これらの二つの時間の特質を生かし、時に関連させることによって、子どもの豊かな育ちを目指すことができるという考えのもと、研究を進めている。

昨年度まで、附属小学校のこころの時間では、「自他を大切にし、共に生きようとする」姿を目指してきた。その中で道徳科では、「考え、議論する道徳」を模索した。そして子どもの実態やねらいに合った学習展開を吟味し、多様な感じ方や考え方を共有できるような板書構成や話し合いを工夫するなど、様々な手だてを講じて取り組む中で、子どもたちが自他を大切にしながら考えを広げる姿が見られたとのことだ。学級活動では、子どもたちの問題意識を大切にしながら話し合いや活動を積み重ねる姿が見られた。また、子どもたちの「今」に合わせて年間プランを作成し、道徳科と学級活動を関連させたテーマを設定して学びを実践に生かしていくことで、課題を自分事として積極的に話し合い取り組んだ。

今後の附属小学校の道徳科では、その時取り上げた内容を自分との関わりとして真剣に考えたり、自分の考えに固執せず様々な視点から捉えたり、広げた考えを生活の中で実践していこうとする意欲を高めたりする姿をさらに目指している。学級活動では、よりよい生活や夢を実現するための課題を見付けたり、友達と協働して話し合ったり決めたことを実現したりすることに自立して取り組む姿を目指している。そして二つの時間を関連させ、広げた考えを実践し、実践したことを話し合いに生かす中で、なりたい自分を見付け、自分と共に自分以外の他を大切にしようとし、学級、学校、家庭、社会での生活を自分たちの手でもっと良くしようと考えていく。附属小学校のこころの時間では、こうした「よりよく生きようとする」姿を“学び”を楽しむ姿を捉え、以下の取り組みを実践していく。

- 「今」と向き合い、実践力を高めていく
- 対話により生き方への考えを広げていく
- 子ども自身が心の育ちを感じられるようにしていく

（2）視察校における授業の実際（第2学年1組 道徳科）

- ① テーマ みんなで にっこにこ 一家族も自分も楽しい夏休みー【Cー(13)家族愛】

② 「よりよく生きようとする」学習の構想

「にっこにこ」という言葉は、親切、思いやり、友情、感謝など様々な道徳的価値が混在したものであり、この「にっこにこ」を増やすことで、「B 主として人との関わりに関すること」そのものを見つめさせることができると考える。

③ ねらい

- これまでの生活を振り返ったり、主人公が家族を大切にしたい気持ちに寄り添って考えたりする活動を通して、思いやりをもって生活することの大切さや互いのよさを認めながら、仲良く生活するよさに気付いたり、家族に対する思いやりや感謝の気持ちをもって接することの大切さに気付いたりすることで、家族や様々な人と進んでかかわろうとする態度を育てる。

4 感想

○ 「みんなでのにっこにこ」のキーワードを生かした授業構成【資料1】

授業の導入で、1学期の生活の中で「みんなで にっこにこ」にしてきたことを振り返ることで、もっと「にっこにこにしたい」という思いが高まり、本時の教材内容である、夏休みの家族との生活にも自然と考えが向いていた。「みんなで にっこにこ」という思いを学校だけでなく家族とのかかわりの中で意識することで、子供たちの生活がより豊かなものになるのではないかと感じた。

○ 問題解決的に考えることのできる教材と発問の工夫

本時では、夏休みの旅行が妹の病気のため行けなくなってしまった主人公が「かぞくをにっこにこ」にするためにどうするのかを考える改作教材を作成し、使用していた。家族全員がにっこにこになるためにはどうしたらいいのか、思いやりや感謝などこれまでの学びを生かしながら問題解決的に考えていける内容となっていた。児童の実態やこれまでの学習を生かして、教材や発問を吟味することの大切さを実感した。

○ 自我関与を実現するために

①「教材との対話」子供たちをその物語の世界に引き込むような範読

②「他者との対話」話し合いを活発に進行させる技術（対話的な話し合いをコーディネートする力）

③「自己内対話」自己内対話を進める静かで落ち着いた時間と空間の確保

これらの3つの場面を通して、自分とのつながりの中で道徳的価値について考えることが、自我関与を実現するために教師に求められていることである。それらを実現するために、授業では、話し合いの形態の工夫もされていた。場面によって、前向き→グループ→コの字と形態を変えていた。教師が意図的に自我関与を促す場面を設定することの大切さを改めて実感した。

○ 教材の提示方法【資料2】

児童には資料を渡さず、教師が挿絵を貼り出しながら範読していた。また、話を最後まで全部読んでしまうのではなく、話を途中で止めていた。そうしたことで、子供たちの教材に対する想像が、より膨らんでいたように感じた。

○ 児童への声掛けの工夫

教師は、児童一人一人に声を掛け、丸を付けながら机間指導をしていた。児童は、「先生に考えを認めてもらえた」と感じ、自信を持って自分の考えを友達に話すことができていたように思う。

○ 授業のコーディネーター

授業後の分科会で、「教師は授業のコーディネーターの役割がある」という話があった。教師は、子どもたちの意見（声）を大切にするあまり、道徳的価値がぶれたり、ずれてしまったりすることもある。道徳の授業をするにあたって、その時間に深めさせたい道徳的価値を常に念頭に置きながら、子供たちが考えを深めていけるような授業を展開していきたい。